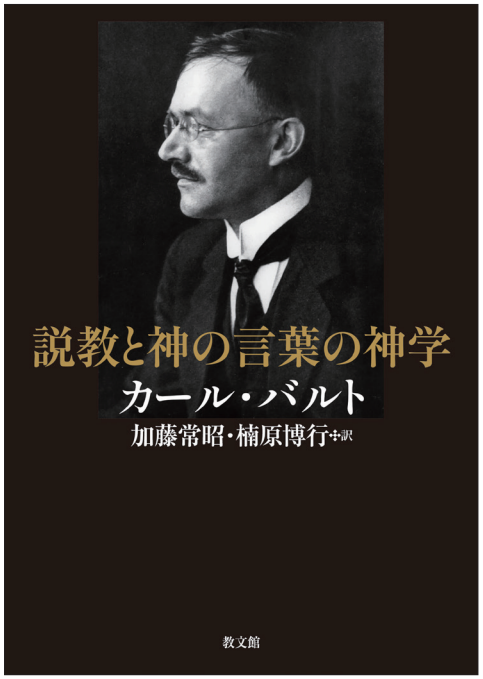
説教と神の言葉の神学

カール・バルト❖著　加藤常昭・楠原博行❖訳



「私どもは神について語らなければならないということと、しかしそれはできないのだということ、その両方をわれわれは知るべきであり、まさにそうすることによって神に栄光を帰するべきである」——バルトの講演集『神の言葉と神学』(1924年)に収録されている「キリスト教会の宣教の困窮と約束」「神学の課題としての神の言葉」の2篇の待望の新訳！　バルト神学の出発点がここに！

「私はこれらのバルトの言葉は今日においても、いや今日においてこそ読まれるべき必読の言葉であると信じている。牧師の子息であったカール・バルトが当然のように神学者としての道を歩き始めながら、自分が神学者であることに当惑し、自分とはいったい何者かとその存在を賭けて問うている。第二の講演のなかで、神の言葉は語られるべきであるが、それはわれわれには不可能だと断言する。ひとつの言い方をすれば、バルトはその生涯を通じて、ここに掲げた神学の課題を問い続けたと言うことができる。そして、その課題は私ども自身の課題なのである。」　（加藤常昭「訳者あとがき」より）

❖著者紹介　カール・バルト（Karl Barth）　1886年生まれ。スイスのプロテスタント神学者。
❖訳者紹介　加藤常昭（かとう・つねあき）　1929年生まれ。現在、神学者、説教塾主宰。
楠原博行（くすはら・ひろゆき）　1963年生まれ。現在、日本基督教団浦賀教会牧師、明治学院大学講師。

B6判・並製・172頁・定価1,980円（本体1,800円+税）　ISBN978-4-7642-6469-4　C0016